



文學士 小原無絃 譯  
ユーゴー  
の詩



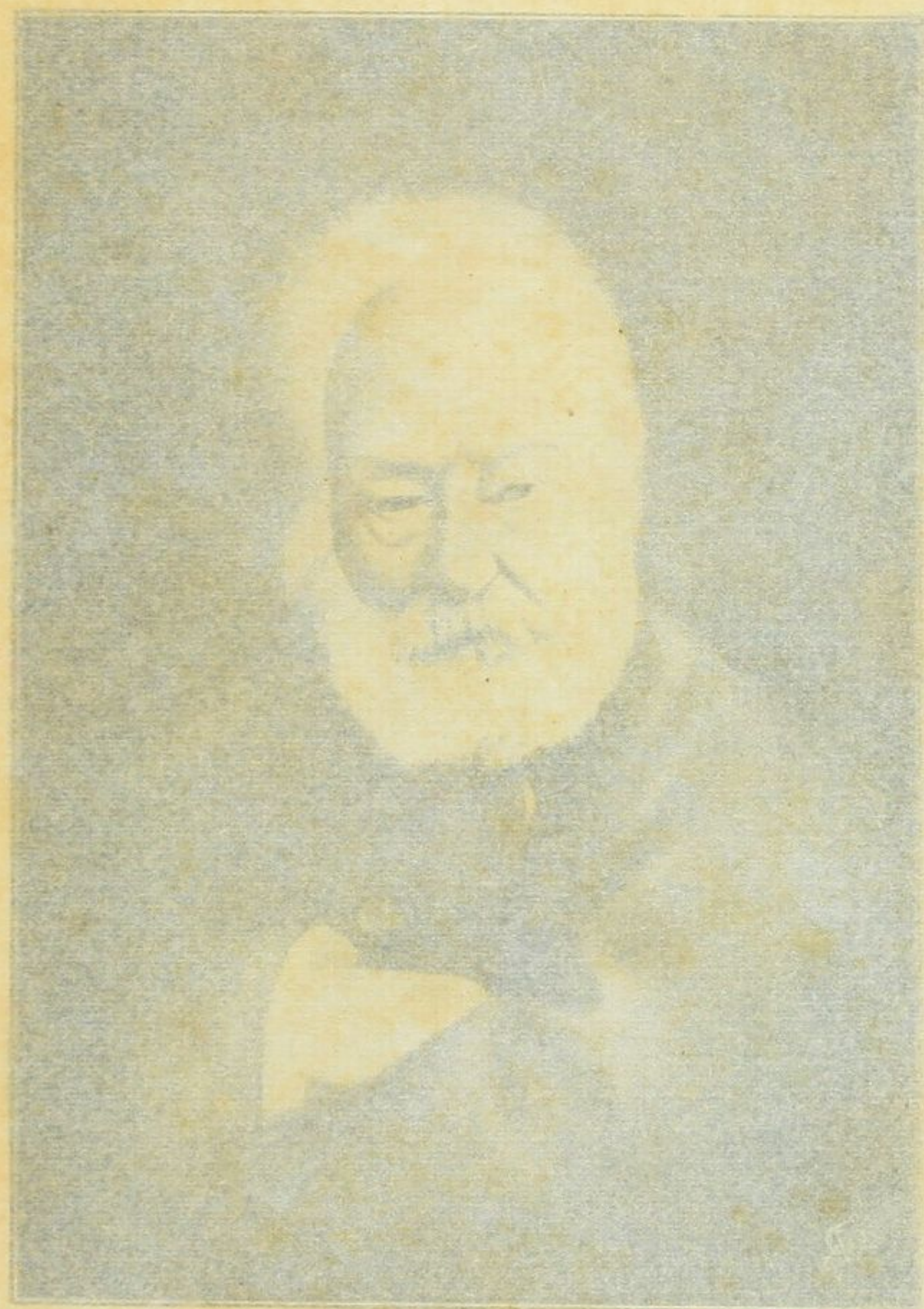


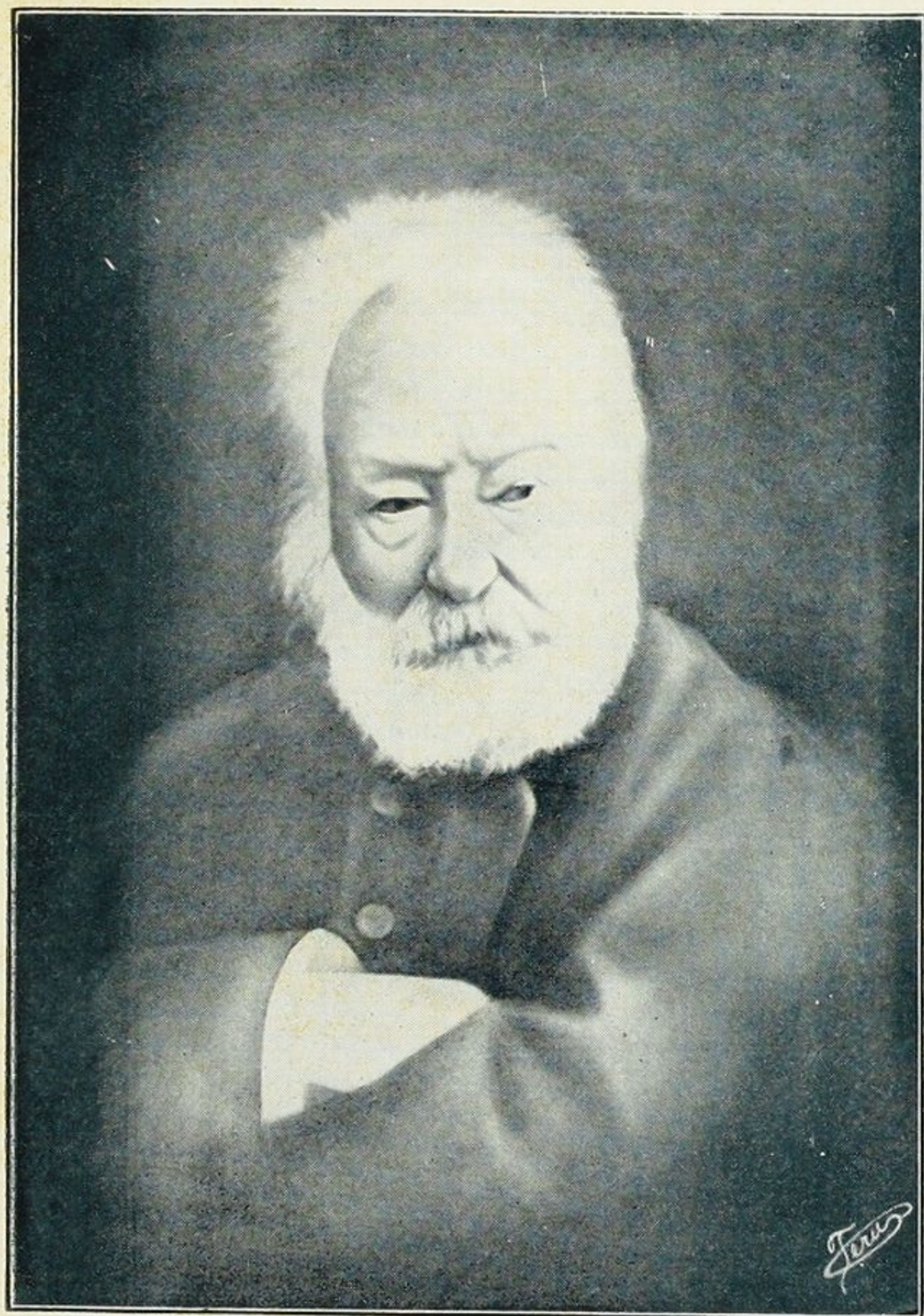


文學士 佐々醒雪君序  
文學士 小原無絃君譯

ユーゴーの詩







子の山口高等学校に在るや、無絃君亦  
この校に學ぶ。偶予が寓は君が家に隣  
す。君は詩歌を愛好し、予も亦吟哦の癖  
あり、花朝月夕乃ち相携へて俳句を討  
はし、相迎へて古詩を談じ、名は師弟に  
して、誼盟友たり。君が笈を大學に負ふ  
や、予も亦來りて東都に在り、君が業を  
卒へて根岸に寓するや、予も亦近く日  
暮里に卜居す、交友眞に一日の如くな  
るもの十年に垂とす。而して君は前志  
を繼ぎてなほ詩歌に專に、近ごろ西詩

の翻譯を事として詩調日にますく、  
新なり。予や碌々、依然蠹魚に伍して學  
究に老いんとす、詩腸既に枯涸して、又  
ごもに詩を論するに堪へざるなり。ユ  
ーゴの詩釋成るの日、君來つて一言  
を求む、誼辭すべからずして言の寄す  
べきなし、乃ち惡句を記して以つて其  
責をふさぐ、亦聊か吟哦の舊癖を存す  
るものああればなり。

移し植ゑしさうびことなるかをりかな

醒雪生

君は吾等の長なり、大君なり、

君が歌はあだかも

焼刃花に薫せる利刀の如し。

スキンパーン。



ユトゴトの詩二十五篇、摘譯してユ  
トゴトの詩とはいふなり。譯者不才  
にして、原詩の金玉を傷くると頗る  
多からんを愧つ。  
卷頭を飾るに恩師醒雪先生の高序  
を乞ひ得たるを光榮とす。  
表紙及び肖像は野路の露子女史の  
筆に成る。  
遙かに此小册子を外山素木君に呈す。

明治卅八年初冬

無絃生識

ユトゴト年譜

- 一八〇三年(一歳) 三月廿六日佛蘭西(パサンソン)に生る。
- 一八〇七年(六歳) 伊太利に行く。
- 一八〇八年(七歳) 巴里(フナキヤンチンヌ)の庭園に住す。
- 一八一一年(十歳) 西班牙に行き歸りて再びフナキヤンチンヌト住す。
- 一八一三年(十二歳) セルシユミデラ街に住す。
- 一八一五年(十四歳) フナキヤンチンヌト中學に入る。
- 一八一七年(十六歳) 佛蘭西學士會の懸賞詩に應じてロト(ロッセ)の派の泰斗(トリス)の賞を著す。  
(ロッセ)の賞を著す。
- 一八一八年(十七歳) 學校を去りて母と同居す。

一八一九年(十八歳) 二兄と共に保守文學を發刊す。

一八二〇年(十九歳) フランスと交る。

一八二一年(廿歳) 母を失ふ。

一八二二年(廿一歳) 歌謡を出して七百フランを得たり、  
のより年金一千フランを受くる。情人をナト  
セ嬢と結婚す。

一八二三年(廿二歳) バンデラントを著す。

一八二五年(廿四歳) シヤトレス王より十字勳章を受く。

一八二七年(廿六歳) クロムカエルを著す。

一八二九年(廿八歳) 戯曲マリヨンドロムを公にし、  
禁止する所となる。死刑者最後の日を書き、

一八三〇年(廿九歳) 東方の詩を著す。

エルクナを興行す。

一八三二年(卅一歳) ノートルダムの塔を著す。  
ロムを興行す。秋葉を著す。

一八三三年(卅二歳) ルアサミリスを興行し、  
禁止する所となる。年金を辞す。  
クレホルツを演ず。

一八三四年(卅三歳) マーリオンを興行す。

一八三七年(卅六歳) クロトドヤを著す。  
内部の聲を著す。

一八三八年(卅七歳) リムイブアを興行す。

一八四〇年(卅九歳) 光陰を著す。

一八四一年(四十歳) 學士會員となる。

一八四三年(四十二歳) 最後の戯曲レピクアラブを興行す。  
長女レガホルを失ふ。

一八四五年(四十四歳)

上院議員となる。

一八四八年(四十七歳)

代議士に推出せらる。自由共和黨員として立

一八四九年(四十八歳)

急進共和黨員となる。

一八五一年(五十歳)

小那翁の死。マダガスカルに逃れて自耳義に逃る。

一八五二年(五十一歳)

小那翁の死。マダガスカルを著し、自耳義よりマダガスカルに

追はる。

一八五三年(五十二歳)

刑罰を著す。

一八五五年(五十四歳)

マダガスカルより更にダレンセルに追はる。

一八五六年(五十五歳)

黙思を著す。

一八五九年(五十八歳)

各時代ノ物語を著す。

一八六〇年(五十九歳)

マダガスカルに赴きカリフォルニアの爲に演説す。

一八六二年(六十一歳)

哀史を著す。

一八六五年(六十四歳)

市ノ森ノ歌を著す。

一八六六年(六十五歳)

海ノ労働者を著す。

一八六九年(六十八歳)

笑ノ人を著す。

一八七〇年(六十三歳)

巴里に歸り代議士に推出せられて主戦論を主張し議會がカリフォルニアの撰挙を否認し、

及んで辭職す。

一八七三年(七十二歳)

恐山可憐年を著す。

一八七四年(七十三歳)

最後の小説九十年を著す。

一八七七年(七十六歳)

祖父マダガスカル道を著す。

一八八一年(八十歳)

精神ヲ出シ四ノ風を著す。

一八八五年(八十四歳)

没してマダガスカル寺に葬らる。

目次

のぞみ……………一  
くはし女……………四  
蝶は如何にし……………  
て生れたる……………七  
二柱の女神……………一一  
カニエート王……………二八  
戀歌……………四九

薔薇と墓……………五一  
たねまき……………五四  
兒守る天使……………五八  
詩神に捧ぐ……………六七  
われぞゑむ……………七四  
挽歌……………七六  
時よりも強し……………七九  
譬喩……………八五

人生のあした……八六  
 かごづけ……八八  
 あはれ童兒……九二  
 われたらへり……九五  
 水夫唄……九九  
 硬心の美人……一〇二  
 薔薇と蝶……一〇五  
 言ふことな……

きや……〇八  
 臨終の兒の母……  
 に寄せたる……一一一  
 ね、などゑま……  
 ざる……一二〇  
 海士のなさけ……一二三

ユーゴーの詩

小原無紋譯

のぞみ

昇れ、栗鼠、櫛の高枝に、  
 花のごとゆらぎ動ける  
 空高き櫛の小枝に。  
 コウノトリ、翼を張りて

古寺の鐘樓の巢より  
やよ、のぼれ、高き衛城に、  
老鷲よ、いや高く高き牙櫓に。  
入日影ふくみて聳てる  
雪白く高き峰頭に。  
やよ、雲雀、揚れよ、雲雀、  
汝れはしも暗を貫く  
朝日子のひかり愛づるよ。

やよ、告げよ、高き梢ゆ、  
そゝり立つ塔の頭ゆ、  
見るや、否、遠野のはてを  
星のごと過ぐる羽冠を、  
此處指して軍の場ゆ  
戀人のはやむる駒を。

くはし女

くはし女よ、汝れもはや、わが如く  
罪のなき幼時を戀ふらくば、  
壯なる年を、はた涙より  
苦きるみを嫉むことなかる可し。

しほれたる花の香の失するごと

幼時もひときに過ぐるなり  
かりがねの歸るごと早き生の  
歡聲も海越えて翔り去る。

春早き汝が朝をたのしめや、  
時立たば老らくの思起り、  
木に寄生る花のごと時來すば  
なかくに枯るることなかる可し。

われがごと 汝もやがて泣くらむよ、  
忠實ならぬ友に、はた破誓に、  
希望なの悲みをいたづらに  
喜悦と装ほふのくるしさに。

汝が定命知らぬこそいとよけれ、  
あゝゑめよ、罪もなう麗はしや、  
天つ世をしろし召す平和は  
汝が眼にぞ映れるよ、あゝゑめよ。

蝶は如何にして生れたりや

曉の匂ひは露にゑみ  
涙にうるむ薔薇に満つ。  
見よや、小さき戀の子は  
白きつばさを翻へし  
あだし色香をとめ行きて、  
茉莉の花に接吻けつ、



聲なき樂をかなでつゝ、  
やがてみ空に飛び去りぬ。  
あゝうつゝななの子が  
うつゝな女子「彌生」子に  
思を寄する歌の譜も、  
文ひとひらに封じたる  
ほこり心も、うすやうを  
卷きおさめたる戀文も、  
酔はす快樂はみつれども、

墨の匂ひのひぬひまに  
忽ち裂かれ、すてられて、  
うたてや、果ては散り亂れ、  
風のすすさびの戯れ種。  
あはれ、戀しの魂とめて  
み空に揚り、野を翔り  
契りし女をもかへり見ず、  
いや麗しくやさしげの  
花もろ共にあざけらふ

白き蝴蝶や、これや、かの  
裂さかれ、棄てられ空高う  
ひるがへりたる艶う書みなるか。

二柱の女神

ペリ女神

艶なる精よ、いとし子よ。  
いざ、海原を越わて来よ。  
みのれる木々に風歌ふ  
天つ御國に朝夕を

あそぶ、たのしと思はずや。  
日ねもす、影は落つるなく、  
玉の御門に汝が母は  
御手をばひらき佇みて、  
いとしき汝れを待てるをや。  
明星ちかく住みませる  
わか姉妹の神たちは  
とはに消ぬざる若やぎの  
花と榮ゆれども、わが

ほごりに立たばかんばせの  
光もあをひそむべし。  
われこそ、あての女神なれ。  
彩てるたへの額装、  
玉くれなねの腕飾、  
われしづく、と久方の  
天つ御空を練り行けば、  
仰げる人の眼もあやに、  
わがむらさきの羽にふるふ

樂士の露を見とむべし。  
水や空なる沖とほく  
流るゝ帆よりいやしろく、  
若葉にあくる夏の夜の  
東にひかりかぶやける  
睡星よりいや清く、  
若草もゆるアラビヤの  
野に行き暮れの巡禮を  
なぐさめ顔に咲き出づる

薔薇の香よりいや高く、  
わが姿こそ匂ふなれ。

フェー女神

うるはしき子よ、われはかの  
日の知る天に住めるなり。  
そこにぞ雲は彩をしき、  
光の行幸了へまし、

書の大君とりまくよ。  
黄金まばゆきわが羽は  
戀うたびとの描くごと  
夕くれまごふみどり野に、  
雨かぐはしくひかる夜の  
闇にもしるくきらめくよ。  
眞砂をはしるいさゝ川、  
その水よりも手は清く、  
息吹は春の野をわたる

そよ風よりもかぐはしく、  
白玉なせる肩の面に  
日のみ光は彩をしく。  
かをる薔薇の唇もれて  
わが調こそひぐくなれ。  
来よ、いざ来よや、青海の  
底に眞珠の洞多く、  
奇しきみごりの野に、山に  
をかしく張りし幕もあり。

來よや、いとし子、花のごと  
 彩うるはしき雲しげき  
 花亭うてなにわれは導きて、  
 人の世になき歌をもて  
 汝れが耳をばなぐさめむ。  
 あはれ、御神の御恵を  
 享けたる牧の童兒わらわが  
 塵のあとなきアーカーヂヤの  
 かすけき谷に寄りつごひ、

吹き合せてし笛もなご  
 この調しらべには及ばんや。

ペリ女神

天つ日の神ひかり美々しう、  
 赤黄の幕の裡にまします  
 ひんがしにこそわが家はあなれ。  
 やよや、ゆたけき國の姫御子、

いざ來よ、ともに黄金まばゆき  
わが舟うかべ、かのかすかなる  
笛のしらべをそこもしらす  
あこがれながら棹さし行かば  
水ふなべりに燃るかぶやかむ。

大なる市府よ、百合花の中なる  
ラホール、カシュミア、はたゴルコンダ、  
巡禮の戀ふるかのイスパハン、

高塔天に入るバグダッド、  
みなわが知らす快樂の領よ、

アレプの港帆桂しげく、  
よるの岸うつ大海にぞ似たる。

ミソレ女王の御座にありて、  
メジナの白き伽藍まばゆく、  
矢なす尖塔日にうつらひて  
光みちたるみ空に高く、

黄金燃ね立つ炎を放ち、  
鎗の林のきらめく如く、  
醜のるみじも之を望まば  
たぶねそろしと顫ひ慄く。

あてなる兒よ、いざや來よかし、  
來よ、アラビ一の弓なす廊に。  
葡萄むらさき國いと古く  
快樂、薔薇の花環をつくり、

歡喜とはに汝がものたらむ、  
われは夜なく夢を守りて  
汝が枕べに歌をうたはん。  
汝が黒髪の垂るゝ處に  
色さまざまの花を敷かなん。

瑞葉みどりのしたゝる蔭に  
おほひは高し、花の錦や、  
夏のよなく、汝れも聴くらむ、



かなづる琵琶の歌のしらべに  
浮世を外まの音ねのあふるれば、  
草ふみ分けて誰ぞや、かろらに  
棕櫚の木ぐれに人寄りつどふ。

フー女神

光充ちたる幸の世に來よ、  
牧野の草はしげりかゝやき、

みどりの洞ほらはどはに朽ちせず、  
清き日ひ光かりはどはに消くわじよ。  
來よ、秋風はどはに吹くなく、  
ちさき愛い弟ごの眼まに見入りて  
はべるやさしき姉もさながら、  
母の乳房ちぶさを口に啣くはみて  
ねむり安けき兒こもさながら、  
清き細流さざはいねたる汝なれが  
足あ元もめぐりて濕ぬほすべきよ。

いざ美し子よ、われに疾く來よ、  
くれなる深く汝が羽そまむ。  
かるゝなき花汝が額飾り、  
消ぬぬ日光は汝れをひたさむ。

兒はひたすら其歌聽きて  
これかかれかと思ひ惑ひぬ  
女神二桂は待ちに待てども、  
こゝろ決め兼ねいやもなやみし

はてを天へと昇りけるかな。

カニユート王

註に曰くカニユート王、老父王  
を弑して王位を奪へり。

カニユート王は崩じぬ。

王は棺の裡に横はりぬ。

アールフースの僧正

爲めに來りて祈禱を捧げ、

墓畔、頌歌を唱へて、且つ曰へらく、

王は聖者なりき

應まさにカニユート大王と稱す可しと。

王を念すれば天香薫すと。

群僧王を榮光の裡に見たり、

王は神座の右方に坐して

戴冠の預言者たりきと。

日没して、

樂聲聖堂に歇み、

群僧<sup>ごほそ</sup>扃<sup>ごほそ</sup>を排して出で、

王の屍を静寂の裡に残して去れり。

時は此時、王忽ち起つて、

物凄き眼をひらき、

劔を執り持ち、屹として歩み出せり。

見よ、重壁も妖精の前には

開いて雲霧の如し。

アールフォース、アルトナ、

エルシノールの堂塔

影を碧波に浸す處、海あり。

海を渡りて王、やみを行くに

「闇黒」も耳を<sup>そはた</sup>敬て、

登音を聞かんとするに似たり、

而も万籟聲なくして

たゞ夢の如し。

直ちに嶮を冒して

サボ山に上りて曰へらく

『風雨に荒れたる山よ、

深雪の大片を興へよ、

朕、殮衣を作らん』と。

山は王を識れるがゆるに

敢て拒まず、

カニューート乃ち劔を抜いて、

皚々たる積雪を截り、

欲する所の衣を作れり、  
而して曰へらく、

『太古の山よ、死は點すと雖も

乞ふ、朕に天庭の路を告げよ』と。

空谷ますく深ふして、

幽竅水霧を噴き、

一簇の白雲悲むが如く答ふらく

『亡者よ、われは知らず、

われ常に茲に在り』と。

カニユート昂然頭を擡げて去り、  
 白雪の玉衣を纏うて、  
 アイスランド、ノールウェイを過ぎて  
 大寂寞、大闇黒の中に入りぬ。  
 王の行く處、  
 幽冥忽ち乾坤を呑む。  
 王は今人跡なき  
 高山に立てり、  
 聳たる王の幽鬼は

無限に對して立てるなり。

競々として

無窮を見渡せば

天の一方、

青光澹として將に沈まんとす。

闇黒と白骨、

結合して忽ち夜となり、

無象の者紛糾して

測知すべからざる

大闇黒の裡に動く。

三六

星なけれども、

閃として光るものあり。

聲なけれども、

闇黒の寄せ來る鈍き音あり、

沈々として

肌を寒からしむる戦慄あり。

王曰へらく

『是れ墳なり』と、

行く三步にして叫ぶらく

『神座正に近し』と。

真に死の如く、墓の如く、

一聲の應ふるなし、

一呼吸の來りて、

雪衣を揺ゆるがすなし、

路に當て

白きもの、亡者を勵すなし。

忽ち王は其鉛色の衣上に

三七

凄々たる星の如き

三八

一點の廣がり行くを見出でぬ。

點はいよゝ廣がり、

暗を射て閃々たり。

カニート手を以て、

之を撿するに、

こは是れ、一滴の血なりけり。

二

見れども物なく、

四邊暗々として聲なし。

カニート傲然として

頭を擧げて曰へらく『進めよ』と。

第二滴の血は

第一滴の傍に落ち、

暫よしていよゝ大なり。

シンブリア國王

厚き暗を凝視すれども物を看ず。

三九



さはれ、血狗の追ひ來るが如く、  
王は悲しげに辿り行きぬ。

第三の紅滴は

皓たる殮衣に落ちたり。

王は遁るゝことをなさず、

唯歩を停めて

劔執る腕の方に轉せり。

一滴の血は

夢を横截せるかの如く、

死衣に落ちて

右手爲めに紅なり。

讀書人の一紙をめくるが如く、

王は歩を廻らして

冥々たる左方に轉せり。

一滴の血は又落ちたり。

カニユートおの慄おのきながら、

身を退きつゝ、

ひたすらひつき柩ひつき出でしを悔みぬ。

されど又一滴、

鮮血の落つる時、

王は停りて、

蒼たる頭を垂れ、

強ひて祈禱を爲さんごせり。

一滴又落ち、

祈禱は歌んで、

鬼氣いよ／＼身邊に迫りぬ。

遅々として暗に動きぬ。

あゝ、王の到る處、

一滴の血は常に落ちて、

其白衣を染めざることなし。

王は白楊の

風に動くが如く、戦ぎつゝ、

一滴、一滴、又一滴と

血痕いよ／＼黒すみ、

數いよ／＼殖ゆるを見たり。

見よ、血痕は

幽界の暗を照すが如く

白衣の襞ひだに流れ落ちては、

忽ち一塊の「血雲」と爲りぬ。

行き行けど

曉知す可からざる天空より

常に滴々として

紅血滴り、

常に聲なく、

恰も、夜、刑臺の上なる死者の

足を傳うて落つるが如し。

あゝ、そも誰ぞや、

此恐るべき涙を垂るゝ。

無窮なるかな――

かの善者の入るてふ天を指して、

満み干ひなき夜の荒海を経て、

王は尙往いて停まらず、

忽ち脚下を射る

奇しき光によりて、  
鎖されたる戸のへに

来れるを知りぬ。  
そは大なる場なりき、

聖き場なりき、  
そは神の光明ひかりの一部なりき、

戸の彼方にあたりては  
讚美の聲さへ響きぬ、  
王は其殮衣を見たるしぬ。

殮衣はなほ紅かりき。

カニユートは停まりぬ。

此の如きは是れ、

カニユートが日光を避け、

顔、太陽の如き審判者さはんしやのみ前に

敢て出づることを  
爲さざりし所以なるよ。

此の如きは是れ、

暗き王が夜の裡にありて、  
其衣を初めの如く、  
雪ぐの力もたず、  
たゞ歩むごとに一滴の  
血の落つるを覺はつゝ、  
そこしへに  
大闇黒の天が下を  
迷うてやまざる所以なるよ。

### 戀歌

わが魂、君がみこゝろに  
牽かれて奇しきまつはりや、  
裂かば、いかでか、わが魂を  
はなれて生命あるべきや、  
君はわが歌、われは琴、  
君はそよ風、われ、野薔薇、

薔薇と墓

われは神壇、君は火よ、  
われは深愛、君は美よ。  
うら泣くひまに疾き時の  
去らばかなしき  
わが歌は  
汝れにや觸れむ、咲く花よ。

墓ぞ薔薇に語りける

『あはれ、薔薇よ、戀の花、  
つゆけき朝の汝がうへに  
そゝぐ涙は何處行く。』

薔薇ぞ墓に語りける

二

『あはれ、語れよ、おゝ、墓よ、

日ごと消ね去り、汝が底に

入るその魂は何處行く。』

三

薔薇ぞ答へぬ。『あなあはれ、

荒れてさびしき冢石よ、

われはゆかしの薫かぶりをば

その涙よりかもすなり。』

四

墓ぞ答へぬ。『かゝやける

くれなる妙たへのおゝ、花よ、

とめ来る魂ゆ光明ひかりの

天使てんしわれはつくるなり。』

たねまき

戸に倚りて見放くる彼方

紅き日のひかりは消えて、

夕影ぞひたも寄せ来る。

あゝ、労働の時は過ぎなむ。

二

野を罩めて闇は深きに、

たゞひとり、残るたねまき、

老いの身を意とせず立てり

われは看てたのゝき覺ゆ。

三

高く、濃きやみの姿は

うねいくつ、埋めて深し。



今し、種子蒔きぞはじめし、  
刈り入れの時はやがてよ。

五六

四

野をひろく彼方、此方の  
行きかひに手より散らすは、  
あらたうと、瑞穂の種子よ、  
見ていよゝ心かなしも。

五

闇深し、光は去りぬ。  
見てあれば嚴つき姿は、  
奇しきかな、高き姿は、  
星しげき天をぬくらし。

五七

兒守る天使

神壇にちかう、  
塵多き隅にはなれて  
母の寢床のかげにして兒ぞ眠れる。  
やすらかに休らふ兒の  
薔薇なす

眼瞼や、地には閉ぢたれど  
み空に向ひ開きたり。  
しげき夢路や、  
蓬萊を兒の看るらく、  
濱の真砂は  
珠なして輝きわたり、  
さす日影照りぞ榮ねたる。  
美姫の

群は手に手をかしくも、  
稚子の魂々さゝげたり。

六〇

あはれ、たのしや、

見よ、細流玉とはしりて、

清き水面に

歌の音のひゞくもすゞし、

姉妹いやもやさしく、

父もあり、

そばにまします垂乳根は  
翼得たるを誇りかよ。

いやあきらかに

兒の見るまぼろし如何に。

薔薇さまざま、

百合花咲いて野路に満ちたり。

たのしげに湖は眠りて、

白銀の

六一

魚はおどりつ、漣こねつ、  
黄金まばゆき蘆に寄る。

ねむれ、いとし子、  
やすらかに美夢をつげな。  
汝がいはけなき  
魂はなほ運命を知らじ。  
根をたねし浮藻の如く  
たそろし

海に生れし汝れなるを。  
これ、そも汝れに何かある。

野路山路にも  
汝はねむるもだね憂ひを  
汝はまだ嘗めじ。

いはけなき眞理宿れる  
汝が額に  
かなしみの寒き手いまだ、

皺なをきざまず錆釘ぎをもて  
『明あ日す』なる悲語をなほ書かじ。  
六四

無心よ、ねむる  
見よ、世の人の得て避けぬ

わづらひ先見れる  
天使等は兒こをのぞきて

夢さねず、夢破らねど  
しかすがに

あつき涙を、うつゝなく  
ねむれる兒にそゝぐかな。

めぐり翔りて、  
天使等の兒を接吻くめば、

涙いぶかり  
『ガブリエル』と兒ぞさけびぬ。

『静かなれ』と天使は言いつ、  
一指もて  
六五

唇おさね、一指もて  
天つ御空を示すなり。

詩神に捧ぐ

生せいあらずとも、下した界かいに  
在りともあらゆるもの皆や、  
薫り、輝き、はた調しらべ  
興へぬものぞなかりける。

生せいきとし生せいけるもの皆や、

菑戀ふるに茨をば  
薔薇愛づるに薔薇をば  
與へぬものぞなかりける。

春は木に心ゆく  
たへの音をこそ授けられ。  
悲むものに暗き夜は  
深き平和、休息をば。

天の泉は花ごとに  
すいしき露を授くめり。  
枝に、梢に清風は  
絃弾き和す友をこそ。

夕くれまどふ汐さへ  
安息得ましたと打ち寄せて、  
みどり堤にかすかなる  
懐抱の痕を與ふるよ。

われ今、さてもあふけなや、

詩神よ、君が膝に凭り

ねが有つものゝそが中の

いとよきものを捧げなむ。

たさめ給へよ。げにや是れ

愁にふさへる餽り物。

思おもひやそゝぐ露なせる

涙となりてとゞかなむ。

わがもの言はぬ誓をば

たさめ給へよ、淨うこそ

御前に捧げ出したれ、

わが生の幕の落つるまで。

わが生まに充てる歡喜こひや、

まどふことなき疑ひや、



媚びへつらひはわが歌ゆ  
滴り盡きてあともなし。

たそれをもたぬわが靈は  
思ふがまゝに天翔り  
たゞ一筋に行く方は  
星ならずして、それ君よ。

あはれ、詩神よ、うつゝなく

世の人みなはほゝゑむも、  
君が泣くをり、もろともに  
泣くを辭せざる者は誰ぞ。

おさめ給へよ、餽り物

こはたゞ君のものなれや  
ひとたび愛の去りもせば、  
心むなしきわれならむ。

われぞゑむ

咲きほこりたる雛菊よ、

おどろく／＼の雲おもく、

冬のすさみはめぐり來ぬ――

『寒きにいとゞわれは咲く。』

夕べの星よ、落つる日よ、

紅きひかりは消へ失せて

地球は暗くらみにとざされぬ――

『くらきにいとゞわれは照る。』

毒の盃手に執るも、

あゝ、わが魂よ、騒がざれ――

静かに墓に面むき得るや――

『さりや、聖徒はほゝゑむよ。』

挽歌

青草離々たる、あはれ、野路よ。

谷間よ。丘邊よ。白き森よ。

など、さは寂たる、墓に似たる。

あゝ、彼れふたゝび來るなけむ。

など、汝が窓の戸しかく閉ぢし。

など汝が花園しかく凋れし。

やよ、家いづこに主人待てる。

あゝ、又主人は茲になけむ。

よき犬守るとも、誰か餌をば

與へむ。家には人もあらじ。

誰をか子よ、泣く。父や戀ふる。

誰をか妻よ、泣く。逝ける者か。

何處に逝きたる。闇の彼方  
何處よ。汝は來し。罪の船ゆ。  
汝が聲などてかかなし。挽歌。

時よりも強し

君が注ぎたる盃に  
君が玉手にわが唇をつけしより、  
君が和魂、胸深く  
君がやつれし顔をあてしより、

今は日影に秘めたる魂の花、  
咲き匂ひたる魂の花、  
稀なる薫り知りしより、  
八〇

二  
君が心をうち明けて  
胸の秘めごと悉く  
告げしかの日の言の葉を  
いこゝ嬉しと聞きしより、

君が唇わが口に、  
君が瞳をわが眼に、  
君が泣けるを見てしより、  
君がゑめるを見てしより、

三  
君が面衣の下に照る  
星のまなざし麗はしう  
わが額のの上に輝くを  
八一

君が時世ときよの薔薇びいより

摘とみし薔薇びいの一房いちぼうが

わが生なの波なみに落おちたるを

ひとたびわれの知りしより、

四

今はたそれじ、勇ゆうましや、

われ常とこ久ひさに老おいいざれば、

うつろひ速はやき時ときに向むかひ、

過ぎよ、過ぎよ、とわれ言いはむ。

誰も摘とみ得えぬ花はな薔薇びい、

君きみが褪あせ行く花はなをわが

胸むねに抱かかきていと暗くらき

深あ穴なの中なかにもわれ行いかむ。

五

君きみがうち振ふる羽はね、よしや、

敗るゝことのあることも、

わが唇をうるほしゝ

愛の盃こぼし得じ。

君につめたき霜あるも、

われには燃ゆる炎ほのほあり、

君はわが愛忘ることも、

わが愛とはに盡きざらむ。

譬喻

君はそれほそき枝のの

たわむとも、身をとめて

歌ふ鳥さながらよ

蓋し、羽ありと知ればぞ。

人生のあした

朝霧もれて高嶺むら立ち、  
ふりし塔日に白う輝き、  
はや、ほがらかに夜は明けたるを、  
晝をし告ぐる雲雀や何處。  
ゑめよ、人々、好き日なるをや。

よし、小夜中に此處追はれんか、  
汝なれが小暗きさびしの墓ゆ  
梟ひ日々の朝日見むとも。

さはれ、汝なが魂、地球の網のがれ、  
「無窮」のながれの照る國得可く、  
一夢、日光ひかりに消ねて失せむか、  
あやしき榮光はなの裡よ、汝なが身は。



かどづげ

一

ゆかしや、汝なれが笛ねの音ねの  
 夕ぐれ、耳みみにひゞくとき、  
 心こころはそらにあくがれて  
 うつゝともなく覺おぼゆなり、  
 奇くしき調しらべに黄金うご時代じだいを

かへす力のこもれりど。

やよ、吹ふけ、吹ふけよ、いとし子こよ、

とこしへ吹ふけよ、やよ、吹ふけよ。

二

たのしや、朝あさの歌うたの如ごとき

汝なれがゑまひの起おこるとき、

いつしか、夜よの影かげ去いりて

あとなきやうに覺おぼわつゝ、

いまさら憂ひ、悲みの  
こゝらの年も忘れ去る。  
やよ、ゑめ、ゑめよ、いとし子よ、  
とこしへゑめよ、やよ、ゑめよ。

三

海をしづむる月光の如き  
汝れが寝顔はともすれば  
わが戀人のまぼろしに

うら懐しくまがふかな、

あはれ、今までうば玉の

夢にもかくは見ざりけり。

やよ、ねよ、眠れ、いとし子よ、

とこしへ眠れ、やよ、眠れ。

あはれ、童兒

母鳥は硬く冷る去り、  
 猫に怖ぢ、同胞も歌はず、  
 風ひたもたけり狂うて  
 むなしき巢揺らぐに任す。  
 あはれ、雛鳥。

二

牧の子は遠くさまよひ、  
 蟲追うて、犬も去りたり、  
 狼は柵を越ゆれど  
 たれ一人檻を守るなし。  
 あはれ、子羊。

三

牢獄いとやにぞ父は落ちたる、

もの乞うて母はさまよふ、

乳兒ちごがぬる床とこも賣られん、

たれか、今はごくむ者ぞ。

あはれ童兒わらはご。

われたらへり

げにやわが獨棲ひきりむ

荒磯あらいそ邊の浪あらく

巖いはほたいそびね立つ。

友みなは凄すこきにぞ

恐怖おそれに堪へで遁れ去らむと

心  
お  
く  
し  
の  
落  
ち  
て  
果  
て  
た  
り。

二

風吹けば睡房ふるひ、  
嵐にはうち揺らぎ、  
みだれ浮く海草に  
似かようて空低う  
ちぎれて迷ふ雲のすがたは  
柩をもるゝ髪もそのまゝ。

三

空とちし棺の上の  
黒布に星照るは  
釘うちてとめしやう。  
睨まへば痴者は  
叫びて暗き蒼溟にたいよひ  
かすけし、夢裡の聲もさながら。

四

わが生はもいよゝ憂く、  
青ざめしとはいへど、  
風吹いて生れし泡沫に  
やさしくも恵まれし

あゝ、「無窮」をこそわれは見るなれ  
『われたらへり』となど言はざらむ。

水夫唄

岸邊よ、さらば、

帆は高う

張られたり。

われ等が愛する國よ、

さらば。

林檎たわゝの故郷よ、さらば。

歌ほがらかに天翔る小鳥よ、さらば。

100

うち笑ひ

『たさらば』告ぐる

寺の長老の

諧謔よ、さらば。

少女子よ、

汝等に甘き接吻心のまゝにせまほしや。  
親しき者よ、さらば——船飛ぶこと疾し。

船首に立ちて涙はらへば

霧の断ま間に懐なつかしや、最後の一目。

故郷よ、少女子よ、小鳥よ、さらば。

帆にあたる風たゞさびし。

さらば、さらば。

101

硬心の美人

常麗<sup>さき</sup>はしき<sup>(1)</sup>少女子に

<sup>(2)</sup>大王、ひと日のたまはく、

『見よや、朕<sup>わ</sup>が劔、かんむりに

いつきひれ伏す國々も

やよや、少女子、汝<sup>な</sup>がために

みな抛<sup>す</sup>つるもなごか惜まむ。』

『陛下よ、神の教徒たれ、

色をあさりて不信者の

かひな戀しとおぼさんは

そはいたましき事なれや、

忠實<sup>ま</sup>のほまれを失は

恥辱<sup>は</sup>の叫びは<sup>(3)</sup>國に充つ可し。』

さはれ、やさしき主<sup>しゅ</sup>よ、朕<sup>わ</sup>れは



きづなき珠のこの紐を  
 ねがはゞ象牙なす汝が頸に  
 捲かしむるべく與へてむ、  
 汝がけがれなき頸飾、  
 念珠にすべみ、朕れにとらせよ。』

(1) シュアンナ。

(2) アクメット王。

(3) 西班牙國。

### 薔薇と蝶

—

人みなは墓に入る。  
 たのしき蝶よ、ゆかしき薔薇よ、  
 いかなれば躑躅へる。  
 など、もろ共にむつび棲まざる。  
 汝がはねを高くうち

汝<sup>な</sup>が清き香の消<sup>ほ</sup>えざる場<sup>ば</sup>は  
日の匂<sup>にお</sup>ふ久堅<sup>くけん</sup>か、  
牧野<sup>まきの</sup>か、谿<sup>たに</sup>か、やよ、家<sup>いへ</sup>を得<sup>え</sup>よ。

一〇六

二

やよ、さらば得<sup>え</sup>まくほる  
汝<sup>な</sup>れ等<sup>ら</sup>が家<sup>いへ</sup>を、色<sup>いろ</sup>を、香<sup>か</sup>を得<sup>え</sup>よ。  
うらゝかに舞<sup>ま</sup>ふ蝶<sup>てつ</sup>よ、  
匂<sup>にお</sup>へる薔薇<sup>ばい</sup>よ、花<sup>はな</sup>か、翅<sup>はね</sup>か。

もろ共に、やよ、棲<sup>すま</sup>めよ、  
愛<sup>あい</sup>しものにこの天<sup>あま</sup>の恵<sup>めぐみ</sup>よ。  
地<sup>ち</sup>の上<sup>うへ</sup>に、はた天<sup>あま</sup>に  
ふさへる家<sup>いへ</sup>は得<sup>え</sup>らるべきをや。

一〇七

言ふことなきや

一〇八

われをば愛づるか、言へよ、少女子、  
さらすばわが家をたとなふ勿れ。  
みこゝろわが身に懸らざらば  
ほゝゑみ、われをばなど苦しむる。

あゝ、言へ、われ等の相逢ふごとに

など、さは黙せる美し少女。  
みこゝろわが身に懸らざらば  
ほゝゑみ、われをばなど苦しむる。

たぼわす、わが手の君を抱くも、  
美し夢をばなど告げまさぬ。  
われ等が川べをさまよふ時も  
幻想にふけりてかく君あるよ。

一〇九

もし、君、われをば厭ふとならば  
わが行く小徑になど、さまよふや。  
こゝろに君をば戀ひ、又怖れ、  
うれしと飛び、又ゆかしと立つよ。

臨終の兒の母に寄せたる

あゝ、汝れ、つねに  
汝れが天使に語るらく、  
ほかの天使の  
かむつどひます御空にぞ  
もの變るなく、  
人いたむなき久堅に

如何にたのしきとならむ。

柱そびゆる天堂よ、

ふき掩ほはれし天幕よ、

百合花をあざむく星に充ち、

いや麗はしき百合花に満つ。

いとまたのしき場なれや、

想像はつひに及ばねど、

天つ御兒等は友たらむ、

心やさしき  
天つ御神は父たらむ。

よるひる燃ゆる灯の如く  
四つの季をば  
そこに住まむは  
如何にたのしきとならむ、  
しか麗はしく、  
しか照り炫ゆる家にして

神の子イエス、  
聖母マリアのそばにして。

幸なき母よ、  
よはくやさしき汝れが子に  
汝れはまさしく  
告げ給ふべきことなりき、  
汝が生もはじめ  
そが生なの如くありつとも、

汝<sup>な</sup> 彼<sup>か</sup>れが身<sup>み</sup>は又<sup>また</sup>  
れがなりしとひこ言<sup>こと</sup>を。

守<sup>も</sup>り 育<sup>た</sup>てしは母<sup>は</sup>なれば  
子<sup>こ</sup>こそ立ちそひ、  
母<sup>は</sup>の晩<sup>お</sup>年<sup>と</sup>守<sup>も</sup>るべけれ。  
衰<sup>お</sup>へしとき、たよりと  
母<sup>は</sup>のちからの

男<sup>お</sup>となりしそが兒<sup>こ</sup>なれ。  
男<sup>お</sup>なるべき者は

汝<sup>な</sup>れは汝<sup>な</sup>が子<sup>こ</sup>に告<sup>つ</sup>げざりき、  
悲<sup>かな</sup>しいかなや、

女<sup>を</sup>みに男<sup>を</sup>に女<sup>を</sup>、  
女<sup>を</sup>に男<sup>を</sup>、それぐに

造<sup>た</sup>りまし、は低<sup>ひ</sup>き生<sup>ま</sup>に  
御<sup>おん</sup>神<sup>かみ</sup>が人<sup>ひと</sup>を

競争きそ あればの御旨みむねをば。  
苦痛いたみ、歡喜こころこび

あゝ、逝きたりな、悲しくも  
なつかしの子は  
汝なれをば一人のこしたり、  
うたてや、母よ、  
汝なが手ぞ籠の戸開あけしに

汝なが美しいの  
小鳥はのがれ去りにしよ。



おゝなどゑまざる

一  
おゝ、などゑまざる。うらゝ、夏日を、  
薔薇の香、秣の香身にあびながら。  
天地はほゝゑるみ——鳥は御空に  
戀歌唱へて萬象みなたへや。  
そをなどゑまざる、

うらゝ、夏日を、  
薔薇の香、秣の香  
身にあびながら。

二

牧野を流るゝ細流の聲は  
戀ひ戀ふものらを誘ふ樂よ。  
むら咲く莖は花もたわぶに  
草苔しげれる床にいこふよ。

そをなど、るまざる、  
うらゝ夏日を、  
天地はうるはし、  
万象みなたへや。

海士のなさけ

日は今暮れしばかりなり  
粗木づくりの草の屋の  
室をとざして闇ふかく、  
戸の隙もれて落つる日の  
のこんの光りかすけくも  
ゆかをば這ひて、壁の上に

懸れる網を照らすかな。

暗きすみなる櫛の匣、

匣には鉢の二つ、三つ

たゞきらくとほの白し。

汚れし帳垂れこめの

寢臺は闇の中に立ち、

うら妖しげの臥褥こそ

そのかたはらに横はれ。

五人の子のよこたはる

臥褥は長う、低うして、

それよ、小さき魂の巢か、

夢もろとも膨らみぬ。

燃ねも盡きなむ竈の木は

あかき焔を放ちつゝ

くらき室をば照らすなり。

恐ろしとてか、青褪めて  
ついで居る母のものたもひ。  
雄たけび狂ふ濤のおと  
聞きてはひとり祈念るなり。  
夜半に嵐の吹き立ちて  
巖に寄せてはむせかへる  
凶つ古大洋すさまじや。  
あはれなる哉、海士が妻よ。

口にするだにあはれなり。  
いと、可愛の夫や、子や、  
われらの心はた魂は  
飢ゑたる獣さながらに  
憐憫、休息もあら海の  
八重の汐路のほかに在り。  
濤いかばかり荒れ狂ひ、  
いと、可愛の夫や、子を、

翻弄ぶかをたもほへば、  
風いかばかり吹きすさみ、  
雲を捲くかとおもほへば、  
底の藻屑と夫や、子の  
なりもやせむの惑ひあり。  
そも何處にかたゝよへる。  
知るよしあしは荒濤や、  
男ごゝろのさからふも、

星ひとつなく、魂もなき  
海の面よりは帆ひとつの、  
あはれ、悲しや、船板は  
たゞ一枚のいのちかな。

あら、恐ろしや、砂濱の  
磯曲に出で、打ちよする  
濤に『彼れ等を連れ歸れ。』  
叫べど、濤に答へなく、

たゞ沸き起ちて狂ふのみ。  
さればと岸をさまよへば  
胸のおもひの亂るゝや。

ジャネット今しくづほれぬ。  
ちかからと頼む夫はこの  
荒れ立つ闇の裡にあり。  
子は皆ちさしたれ一人  
救助にいづる者もなし。

「子等さかりなる年ならば……」  
あゝ、言ふ勿れ、垂乳根よ、  
子等また大洋に浮ばんか、  
「いそけなかりしならば……」とや  
汝れなかくに歎くべし。

ジャネット灯をば携へぬ  
夫あやうげの時なれや  
ジャネット出でぬ。夜や明けぬ。

マストの上に救助呼ぶ  
火もや見ゆるとそらだのめ。  
あゝ、なほあらず——なほあらず——  
なほ夜の明くるけはひなし。

闇たゞ水をとちこめて  
一すぢだにも光りなし。  
雨たゞ降りしきて  
曉の雨いとくらし。

晝ふるひつゝ来りたり。  
出産おそるゝ嬰兒のごと  
あけぼの若う叫びたり。

あはれ、忽ちジャネットの  
やさしき眼は闇ながら  
顔れかゝれる家を見ぬ。  
内に灯もなく——薄き戸は  
たゞはたたくとはためきつ、

昔ほの青き壁を蔽ふ  
屋根はあらしに敗れつゝ、

波立ちさはぐさゝ川の  
濁れるよりも色黄なり。  
『あゝ、この家ぞ、かの寡婦  
病の床に就けりしを、  
心のこしてわが夫の  
さらばとばかり出でしなり。』

いざ入りて見む、事なかれ。』

聞<sup>き</sup>耳<sup>みみ</sup>たてゝたとなへど  
更にいらへはなかりけり。  
ジャネットふるひ『夫<sup>つま</sup>もなき  
一人ぐらしの二人まで  
子をもち、嘸<sup>さぞ</sup>や不自由の  
こと多からむ、好き人を。  
石さながらに睡<sup>ね</sup>込<sup>こ</sup>めるや。』



また戸を叩きおとなへど  
内にそよとのけはひなく、  
それかとの音もあらずして  
答へはあらず——さと扇あはせ  
心なき戸も、あはれとや  
思ひ、をのゝきたりしやう、  
開いて前にたほれたり。

入りつ、灯をもて静かなる  
家を照らせどたこゝては  
荒れ立ち狂ふ大濤の  
ひとり響を聞けるのみ。  
うすき屋根より雨落ちぬ。  
あゝ、おそろしや、何物か、  
伏し横はるものゝある。

※  
※  
※  
※  
※

『げにや、人をば慰めし  
かの接吻や、垂乳根の  
母の稜威や、兒の花や、  
歌や、微笑や、うつくしく  
淨き愛や、舞技や、  
名ごりの果はそも如何に、  
ひとつの標本——墓なれや。』  
そもいかなればジャネットは

しか速かに去りにしや。  
もの恐ろしきその家の  
内にて何を爲したりや。  
合羽の下にとりもちて  
息せき歸りみづからの  
床に入れしは何なりや。  
顔かなしげに歩みつゝ、  
胸乳いたげに死人より  
奪ひしものは何なりや。

そゝろ悔恨のきれはてし  
絃に觸れつゝ、ジャネットが  
うれはしげにも佇めば、  
聲 噎れはてし荒濤は  
たねぐ漏るゝため息に  
和するもうげに曙は  
海のきはみに白みたり。

『あゝ、あはれなるわが夫や、  
五人の子をもてるだに  
わづらひ既に多かるを  
多かる皆のためにとて  
夫のみ一人働くに、  
この上増さば如何ならむ。  
あゝ、そも夫の登音か。』

『あらず、そは是れ、わが夫の』

爲めに恐るゝ嵐のみ。  
 あゝ、われ悪しきことしたり。  
 夫もし、われを撲たむとも  
 責むる言葉のあるべきや。  
 戸は動かじや。まだなりや。  
 あはれの人の。』とジャネットは  
 胸のうれひに、ほも堪へず  
 眉をひそめて立てるまゝ、  
 夫がおす艦に吹き寄する

その風濤の鳴る音も、  
 磯曲にちかう飛び叫ぶ  
 黒鷗の聲も聞かざりき。

忽ち肩さど開きつ、  
 今しやうやく明け放くる  
 朝のひかりを浴びながら、  
 待ちに待ちたる好き海士は  
 ぬれそぼちたる網曳いて

あわたしげに、嬉しげに  
闘しきりのうへに立てるかな。

『汝なれなりしよ。』と妻めづは叫び、  
戀こひせる少女せうごさながらに  
つと身を起し寄り添うて  
夫つまをば胸むねにかき抱き、  
心こころをこめの接吻くちづけや。  
『われなりつるよ、我わが妹子むすめよ。』

夫つまのおもてはジャネットの  
愛なまけによりて心まで

すがくしきを表はしぬ。

『海うみの日ひ和わは如何いかなりし。』

『いと悪わるしかりき。』海うみ幸さいは。』

『いと悪わるしかりき。山やま賊だちの

宿しゆくもかくやと思おもはれし

今宵こんせうの海うみや。さはいへど

いまし抱かかければわたのし。』

『吹き吹く風に魔神の  
こもりたりしか、網は破れ、  
釣りみな折れて獲物なく、  
乗れる小舟の碎くるは  
今かくと思はれき。  
そもや、いましは長き夜を  
何をか爲し、ジャネットよ。』

妻は聞ながらをのゝきつ、  
『おゝ、わが身とや、何事も――  
襪を縫ひぬ、兒をねせぬ、  
恐ろしかりき、いかづちと  
濤どよみしも止みにたり。』  
ためらひつゝも應へしが、  
更に言葉をつぎけらく――

『となり人は昨夜死にぬ。』

思へば汝れが出で立ちし  
のちのことなり、子二人を  
遺して、あはれ、死にてけり。  
小さく弱き二人をば、  
一人はからく片言ちて、  
一人はからく走るのみ。』

海士は真顔や、片隅に  
雨、潮風にそぼちたる

毛皮の帽を投げ出しつ、  
頭かきつゝ、つぶやきつ、  
しばし経て後言ひけらく  
『われ五人の子をもてり、  
七人とせよ、七人ぞ。』

『動ともすれば、しけ日には  
夕餉の喰へぬことありき。  
今や、あゝ、よし、これや是れ、』

わが過ちにあらじかし。  
かゝらむ事は旨ふかし、  
そは善き神の御旨なり、  
いやしきわれは語り得じ。

『そも如何なれば神はわが  
拳こぶしに似たるうなるより  
母の生命いのちを奪へるぞ。  
そは知り難し、智恵深き

博士たちこそ解げし給へ—  
かのいはけなき幼こ兒なまこは  
働き得ねどもものいらじ。

『妻めかけよ、いざ兒等を連れて來こよ。  
死人のへにて眼覺めなば  
嘸やおおそれのたほからむ。  
母なる人はわが家を  
よくおとづれし者なれば、



などか、われ等は其子をば  
引取らずしてよかるべき。

『われ等の兒等のはらからと  
なりて二人も夜なくを  
わが膝にこそとりつかめ。  
神もわが棲むあばら屋に  
この賓客のあるを見ば、  
いや幸多き海幸を

天つ御神は賜ふべし。

『方のかざり稼がなむ。  
美しき酒をもやめつべし。  
いざ連れて來よ、如何なれば  
さはためらふや、やよ、妻よ、  
足うごかすを厭へるや。』  
やをら帷をかき上げて  
妻の言けひらく『此處に在り。』

ユーゴーの詩完

明治三十八年十二月四日印刷  
明治三十八年十二月七日發行

ユーゴーの詩奥附  
定價金三十錢

譯者 小原無絃

發行者 吉田正太郎

印刷人 今井鐵次郎

發行所 本郷書院

印刷所 今井活版所

不許複製

賣捌

東京堂、上田屋、前川文榮閣、林平次郎、東海堂、北隆館、良明堂、大阪吉岡、杉本書店、久留米菊竹、名古屋川瀬、星野文星堂、其他各書林

文學士 久保天隨著

評釋 日本絕句選

定價三十錢  
郵稅四錢

本院書鄉本  
出版目錄

人を以てすれば四十家、詩を以てすれば百首、菅公  
謫居の詠より以上、人口に膾炙する古今の名吟佳什  
大抵網羅して剩すなく、加ふるに、評釋の文、流麗  
婉美、一講すれば齒牙の香三日失せず。明窓淨凡の  
上必ずこの好伴侶なかる可からず、敢て世上才人の  
一讀を勧む

文學士 上田敏著

# 詩海潮音

定價金壹圓

郵税金八錢

總クローズ製 金文字入 美本

歐洲詩壇最近の思想と聲調とを紹介し之を新體の國詩に移植したるもの、かの莊麗にして婉美なる詞華に奇想幽思を歌ひいでたる象徴詩人の作最も多し。彼邦の評界今なほ之に就いて詳細なる論議に乏しく吾邦の藝苑素より未だ之を傳唱すること無き清新の聲に樂まむとする人よ來てこの集に聽け。

新 詩 山川登美子君 合 第  
社 増田まさ子君 二  
同 與謝野晶子君 作 版  
人

## 戀ごもろも

中 澤 弘 光 君 畫

山川登美子、増田雅子、與謝野晶子の三女史は、多年新詩社の星紙上に顯れ、近時我國短詩壇の潮流いと新らしきものあり。由は、實に女史者首唱の力多きを由たり。わが書院曩に「毒草」を出だししが、今また切に「三女史」を以て此集を得たり。山川、女史は既に二三の著あり。増田は初めてその詩才を窺ふべし。文藝の眞價を知らず、未だ口吻を以て詩歌美術を讀めり。稱する者、往々猶偽善者の熱意かばかり、自家を語る人、熱意かばかり、自家を語るに、此に在るを悟るべきなり。

みだり髪型美本 二十月中出版  
みだり髪型美本 二十月中出版  
みだり髪型美本 二十月中出版

發兌元 東京市本郷區六十二番地 本院書院

本郷書院出版目錄

文學士

尾上柴舟著  
柴崎恒信畫

金

帆

定價金四十錢

郵稅四錢

先生は温順快活の人、其詩また流麗曲雅、當今佶屈贅牙溢怪奇を以て詩の能事とする風潮の中に起つて、恰も熱砂の中を逝く一筋の清流のごとくすらくとしたる風趣を以て一種獨特の新聲を試みたる此書收むる處四行詩、長詩、譯詩數十篇皆雋麗西詩の眞髓を得て更に一步を進めたるものこれ眞に現今詩壇の一明星也一曉鐘なり

◎初版

忽ち再版出來  
賣切

與謝野鐵幹君合著  
上野品子君序  
馬場孤蝶君跋  
藤島武二君畫  
内海月杖君序  
瀧董君跋

毒

草

四六大方形美本◎紙數百參餘◎特製(表紙クローズ製)定價金七拾錢◎洋裝並製金五拾錢◎郵稅各金六錢◎市内小包料五錢◎製本既成  
この夫妻の新しい詩文集を「毒草」と云ふ。知らず、讀む人をして酔はしむるや。唯見る、紅紫の花月もあやに、砂香蒸すばかり薰りぬ。初版早々盡きて、こゝに増補訂正第三版を出たせり。

大學教授 芳賀矢一先生校訂  
大學助教授 藤岡作太郎先生序文  
文學士 佐藤芝峰先生著

英燭對譯 小倉百首評釋

定價金四拾錢  
郵便稅四錢

小倉百首一度出でしより爰に幾百歳、竜田吉野の花紅葉、宛として机上、一冊に句ふの觀あり。文學士芝峰君、優麗婉婉の筆を以て之を釋し、英獨兩譯を加へて批言最も適當を推す。文の妙、評の巧、現時の文界多く其例を見ざる所也。和歌を嗜むの士、語學を修むるの、焉んぞ此書を閱せずして可ならんや。冒頭添ふる所の總論一篇、最も著者の識見を伺ふに足る。幸に一讀を玉へ。

本郷書院出版目錄

文學士 蜷川石水 渡邊清江 共著

滑稽笑話

定價金廿五錢 郵稅四錢

新式の滑稽笑話○著者は文學士と文學士とで共に赤帽の兵隊さんである。話は總て嶄新奇拔で、滑稽笑話願を解くまに〜人生百般のこと、特に時局に關して、諷刺的訓戒的の新趣を漏して居る。紳士淑女諸君是非一本を購つて、新式の滑稽文學を御覽なさい。

初版 忽ち三版 賣切

本郷書院出版目錄

文學士 越迺背山著

時代笑話 滑稽文學 定價金廿五錢 郵稅四錢

文學士 小原無絃著

ユーゴーの詩 近刻

文學士 尾上柴舟著

森の歌 近刻

文學士 佐藤芝峯編

美文韻文 筆のあと 附作文大要

# 春鳥集

著明有原蒲

君繁木青 ● 畫挿 ● 匠意訂裝

錢六稅郵 ● 錢十七金價定

著者の詩は徒らに新奇を  
衒ふものにあらず。たゞ  
舊慣に甘んじ難きものあ  
りて、直に著者が胸裡に  
向て、そが餘蘊を絶たむ  
とする努力なり、随てま  
た懺悔なり。こゝに精苦  
の作を試み長短積で漸く  
三十有餘篇を成しぬその  
多くは尋常敘情詩の陳域  
を脱して更に別途に出で  
たるものなり。著者はま  
た巻頭の自序に於て志す  
ところの什一を敍べたり

井上劔花坊序及閑  
巖 郷右衛門編

やなぎだる

定價金廿二錢  
郵税金二錢

簡勁にして深く人情に入り滑稽にし  
て直に社會を描き美感を人に興ふる  
は即新川柳の生命なり  
輕佻、浮薄、怠惰の社會を諷刺罵倒す  
るは之れ新川柳の赤心なり幸に新川  
柳の趣味に通ぜんと欲するものは必  
ず「やなぎだる」を一讀せざるべから  
ず  
初版旬日賣切再版

文學士 小原無茲先生譯

西吟新譯

刻 近

本書は西歐詩星○ウチーゾウチー  
○スコット○フレチャー○ヒーマン  
ス夫人○カメル○ヘリック○ハイロ  
ン○パンス○グレイ○ブラウニング夫  
人○ローガン○ロングフェロー○ユ  
ーゴー○テニソン等の名吟玉詠を小  
原文學士の彩筆を以て新詩型に譯せ  
しもの也、西歐文學の精華を味はん  
とするの士は須く一本を座右に供へ  
ざるべからず

文學士 小原無絃譯  
**花の詩**

定價 未定  
卅九年一月一日發賣

篇中收むる所皆是西華の粹、燦爛たるあり清楚たるあり幽婉なるあり、輕妙なるあり、加ふるに譯筆明媚精細、雅趣津津たり。此名篇と此彩筆と相待つて光彩更に陸離。若し夫これを披いて明窓のもとに誦せんか餘香縷々を載せて華唇の國に入らむ。嗚呼、此藝園裡花神の懷に眠らむと欲するものは請ふ來りて『花の詩』一篇に接吻せよ。

在米 華山木村竹葉著  
**新渡米案内**  
定價 貳拾錢  
郵稅 貳錢